



Title	秋水軒尺牘中に引用せる典據と解註
Author(s)	吉野, 美弥雄
Citation	大阪外国語大学学報. 1952, 1, p. 83-98
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80087
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

秋水軒尺牘中に引用せる典故と解註

吉 野 美 彌 雄

On "Ch'iu Shuei Hsüan Ch'ih-tu"

Yoshino Miyao

S u m m a r y

"Ch'iu Shuei Hsüan Ch'ih-tu" (秋水軒尺牘) is a collection of the ancient Chinese everyday social letters written in most antiquated style, and may justly be regarded as one of the best of the kind. It includes those letters by several so-called wên an hsien shêng (checkers), officials in charge of archives in ancient Chinese government offices, and is divided and sub-divided into 4 volumes, 8 classes and 223 chapters. Very signal characteristics of these letters are their abundant allusions of historical events and ancient customs, and many rhetorical expressions of exquisite beauty. This, therefore, makes them most difficult reading, but they are to be profitably studied for reference by the students of "Ch'ih-tu" in view of what is said of them: that they were constantly used in ancient China by expert officials in charge of writing.

The chief authorities from which so many passages in these letters are quoted amount to as many as more than 200 in number, and if we mention them according to their quotation-rate, they are, first "Ching Shu" (經書), "Chinese classics such as "Shih Ching,, (詩經), "Tsuo Chaun" (左傳), "Lun Yü" (論語), "Chuang Tzu" (莊子), "Mêng Tzu" (孟子), "Shih Shuo" (世說), "Shu Ching" (書經), "Li Chi" (禮記), etc., secondly "Shih Shu" (史書), histories such as "Shih Chi" (史記), "Hou Han Shu" (後漢書), "Han Shu" (漢書), "Chin Shu" (晉書), "T'ang Shu" (唐書), "San Kuo Chih" (三國誌), "Chan Kuo Ts'ê" (戰國策), "Nan Shih" (南史), "Sung Shih" (宋史), "Pei Shih" (北史), etc. and thirdly "Tu Fu Shih" (杜甫詩), "Tao Chien Shih" (陶潛詩), "Li Pê Shih" (李白詩), "Tu Mu Shih" (杜牧詩), "Su Tung P'ê Shih" (蘇東坡詩), "T'ang Shih" (唐詩), "Ku Shih" (古詩), "Ku Yên" (古諺), "K'ou Pei" (口碑), "Tsa wên" (雜文), etc.

Now our education system has largely been altered and the new system embraces too many courses of study for the students to devote all their time to the study of Chinese classics, these letters have become very unfamiliar to the public.

As people in ancient China were not permitted to enter government service in their native places, they would receive official appointment in strange parts of the country. They took up their temporary residences at unfamiliar places and

led a wandering life like a drift. Consequently their complaints of annoyances due to uncomfortable circumstances take the great part of the letters, but they may justly be valued for their exquisite style than for the substance.

解 題

秋水軒尺牘は往來尺牘の最も古體のもので、故事典故を豊富に引用した。最も難解のもので、中國尺牘書中の白眉である。修辭上より見ても至妙なるものが多い。従つて中國尺牘を研究する最高の参考に供するにたるものとして推奨してよい。

筆者は昔時官署に於て文書記録のことを掌つた、文章の専門家所謂文案先生衆人の手に成れるもので、官吏の同輩又は上官に寄するもの、家庭間の應酬、親戚朋友間の通信を輯めたものである。

内容大意は遠く故郷を離れ他郷に寄留し、海萍雲鳥の如く處々にさすらひ住む、不自由なる役人生活の模様と、留守家族の安否を氣遣ふ心の切なるものを述べている。

本書は内容よりも、文章の佳絶なる點に於て稱美さるべきである。但し教學制度の改まり、學科多岐多端となり、力を漢文學に専らにすること能はざる當世に於ては、一般尺牘として實地應酬の用には縁遠いものと云はねばならない。

全篇を分類すれば、4卷、8類、229章となる。

第1卷	通候類	67章		
第2卷	慶弔類	30章	慰勸類	21章
第3卷	請託類	26章	辭謝類	53章
第4卷	索借類	9章	允諾類	12章
	戲謔類	11章		

典 據

全卷に引用されている出典の主なるものを摘録して見ても實に200餘種に上るのである。今ま其の引用度の最も高いものから順次挙げると下の如くである。(書名下の數字は引用度数を示すもの)

1 詩	經	48	2 後漢書	40	3 史記	37
4 漢書		35	5 晉書	26	6 左傳	22
7 孟子		19	8 論語	18	9 唐書	17
10 莊子		16	11 世說	15	12 古詩	14

13	戰國策	14	14	三國志	13	15	禮記	11
16	易經	9	17	杜甫懷李白詩	9	18	杜甫詩	9
19	孔子家語	7	20	杜牧詩	6	21	唐詩	6
22	太平廣記	6	23	淮南子	6	24	南史	6
25	宋史	6	26	搜神記	6	27	蘇東坡 (韓文公碑、赤壁賦)	6
28	陶潛詩	5	29	西京雜記	5	30	陶淵明 歸去來辭	5
31	楚辭	4	32	北史	4	33	李白詩	4
34	書經	4	35	李商隱詩	3	36	荆楚歲時記	3
37	蘇軾賦	3	38	易說卦傳	3	39	古諺	3
40	四時寶鑑	3	41	神仙記	3	42	王維詩	3
43	荊州記	3	44	越諺	3	45	賂賓王詩	3
46	韓愈詩	3	47	柳子厚詩	3	48	續晉陽秋	3
49	容台集	3	50	說文	3	51	全唐詩話	3
52	古今注	3	53	詩話	2	54	塩鐵論	2
55	瑣言	2	56	雜錄	2	57	戎昱詩	2
58	白居易詩序	2	59	劉秉忠詩	2	60	畫箱記	2
61	宜都山川記	2	62	高駢詩	2	63	倦游錄	2
64	劉禹錫文	2	65	韓詩外傳	2	66	禮儒行	2
67	吳偉業詞	2	68	禽經	2	69	韓非子	2
70	風土記	2	71	孟郊遊子吟	2	72	李密陳情表	2
73	太真外傳	2	74	周書	2	75	國語	2
76	天寶遺事	2	77	呂氏春秋	2	78	文選	2
79	江淹別賦	2	80	黃庭堅詩	2	81	列子	2
82	李白上韓荊州書	2	83	鶴林玉露	2	84	抱朴子	2
85	聞後錄(以下1回のもの)		86	朱子讀書樂		87	魏武帝詩	
88	劉克莊詩		89	傅亮文		90	西園雅集	
91	唐元德秀傳		92	唐李義府詩		93	溫至筠詩	
94	桂苑叢談		95	王昌齡閨怨詩		96	劉安招隱詩	
97	朱淑貞詩		98	三輔黃圖		99	國史補	
100	張衡西京賦		101	木蘭詩		102	武瓘詩	

- | | | | | | |
|-----|--------|-----|----------|-----|--------|
| 103 | 王 粲 詩 | 104 | 御 覽 | 105 | 枕 中 記 |
| 106 | 語 錄 | 107 | 文 士 傳 | 108 | 荀 子 |
| 109 | 孫 子 | 110 | 博 物 志 | 111 | 桓譚新論 |
| 112 | 鄉飲酒禮 | 113 | 月令廣義 | 114 | 帝王世紀 |
| 115 | 江蘇通志 | 116 | 諸葛孔明書 | 117 | 司馬法 |
| 118 | 洪北江詩話 | 119 | 漢武故事 | 120 | 王勃滕王閣序 |
| 121 | 文獻通攷 | 122 | 潘子看詩話 | 123 | 唐方干詩 |
| 124 | 開元遺事 | 125 | 秦韜玉貧女詩 | 126 | 東方朔神異經 |
| 127 | 裴 度 詩 | 128 | 楊 次 公 詩 | 129 | 夢筆溪談 |
| 130 | 莪 詩 | 131 | 禮 檀 弓 | 132 | 大 戴 禮 |
| 133 | 續齊諧志 | 134 | 高 士 傳 | 135 | 古今樂錄 |
| 136 | 廣 州 記 | 137 | 述 異 記 | 138 | 楞 嚴 經 |
| 139 | 潛確類書 | 140 | 博 物 注 | 141 | 周 禮 |
| 142 | 方輿勝覽 | 143 | 說 苑 | 144 | 李 賀 詩 |
| 145 | 筆 談 | 146 | 名臣言行錄 | 147 | 易經乾卦 |
| 148 | 潘大臨詩 | 149 | 易 林 | 150 | 羅 隱 詩 |
| 151 | 通 鑑 | 152 | 金 剛 經 | 153 | 虞 集 詞 |
| 154 | 古 樂 府 | 155 | 提 要 錄 | 156 | 翰 墨 記 |
| 157 | 誠 齋 集 | 158 | 天 白 帖 | 159 | 輟 耕 錄 |
| 160 | 洛中記聞 | 161 | 蘇 武 傳 | 162 | 東軒筆記 |
| 163 | 李義府詩 | 164 | 畫 壘 錄 | 165 | 離 騷 |
| 166 | 溪 堂 集 | 167 | 事類合璧 | 168 | 唐 谷 詩 |
| 169 | 王子敬話 | 170 | 爾 雅 | 171 | 魏 書 |
| 172 | 蕭繹與王儉書 | 173 | 顏氏家訓 | 174 | 易 繫 辭 |
| 175 | 韋莊立春詩 | 176 | 常 建 詩 | 177 | 貴 耳 集 |
| 178 | 通 志 | 179 | 擴 古 | 180 | 異 苑 |
| 181 | 冷齊夜話 | 182 | 儀 禮 疏 | 183 | 古 劍 詩 |
| 184 | 韓 偓 詩 | 185 | 辛龍遜柳詩 | 186 | 堯 典 |
| 187 | 范大成詩 | 188 | 幽 怪 端 | 189 | 庾 信 文 |
| 190 | 一 統 志 | 191 | 顏真卿麻姑仙壇記 | 192 | 格 物 論 |

193 謝朓送范雲詩	194 老子	195 白居易琵琶行
196 羅鄴寄友詩	197 李易安調	198 崔浩女儀
199 晉劉琨與親書	200 明皇雜錄	

解 註

例 言

1. 全篇 4 卷 8 類中から十數章を文例として摘録して解説した。
1. 原書は尺牘文であるから前文、本文、後文の分ちがあるが、今は冗漫を省いて本文のみを掲げた。
1. 原書は白文であるが、句讀、訓點、送り假名附きの訓讀法を採らずに、新式標點附きに改め中國音で棒讀するのに便したものである。
1. 文例には字義、語釋を施し、更に口譯をつけて、大意を述べることにした。

文 例

1. 與徐養安（第 1 卷、通候類八）

聞足下之名久矣，平時相慕切，而相遇終疎；不意清和之首，得於會城客邸遇之。

伏見大兄春雲意氣，秋月丰裁；不啻雞鶩羣中，矯然一鶴，益令人心折無似！旋以蒲輪適館，分手匆匆；而弟自重午歸來，日與管城子共晨夕，勞狀概可想見。

足下目無全牛，奏刀立解；當此輕衫團扇，一榻清閒，知不與笨伯同其役役也。

【語釋】（平時）平生，ひごろ。（終疎）終に多くなかつた。（清和）陰曆 4 月，4 月の異稱。（會城）省城。（客邸）旅舎。（春雲）態度の溫柔明朗なること。（秋月丰裁）容貌の清朗なこと，有徳の人の心の清いこと。（不啻）ただに……のみならず。（雞鶩羣中）にはとりとあひるの群の中，多くのつまらぬ者の中でといふ意味。（矯然一鶴）獨りことさらに秀でてゐる，群鷄中の一鶴。（心折無似）此上なく心服する。（蒲輪）がまでつきみ動搖をふせぎ安穩に行かせるようにした車輛。（適）至る，往く。（匆匆）いそがしく，あわただしく。（重午）重五に同じ，午と五と同音，端午。（管城子）筆の別名。（目無全牛）眼中に困難なことなく何事もやればすぐ成就する，莊子『庖丁解牛，目未嘗見全牛，奏刀砉然莫不中肯。』（笨伯）愚人。（役役）苦勞，骨折。

【口譯】久しくあなた様の御高名を承つて常にお慕ひ申して居りますが、つひぞ相遇ふことがありませんでした。思ひがけなく 4 月の初めに省城の旅館で面會することが出来ました。私がおみうけしたところ、あなたのおきもちは春風の如く柔和で、お姿も極めて清朗で居られ全く我

等の仲間の中で斷然群を抜いて立派で、人を此上もなく心服させます。あなたの御歸館の爲め、あわただしくお別れせねばなりませんでした。私は端午の節句に歸つて來てから毎日朝から晩まで筆墨と取組んで日を過して居ります、その苦勞の程は全く御想像に難くないと思ひます。あなたは眼中に困難なこともなく何事もやれば順調に成遂げられませう。この向暑の砌り、浴衣がけに團扇姿で床机に靜かにくつろがれ、私の様な愚人の貧乏で暇のない生活とは大分かけ離れてゐるこゝ存じます。

二、復陳憲章（述懷）（通候類、二十七）

九十春光，轉眼綠肥紅瘦；素心人遠，良會何時？

足下重到樂城，駕輕就熟；惟試青萍於寸鐵，未免用違其長。

弟伏櫪如故，而當此半簾花雨，孤館無聊；聽好鳥於枝頭，殊覺懷人之滋切耳。

【語釋】（九十春光）春季3ヶ月，合計90日，『春光』春景色。（綠肥紅瘦）春景色おとろへる意。李易安調『試問捲簾人，却道海棠依舊，知否知否，應是綠肥紅瘦。』（素心）心の潔白。（良會）良晤と同義，楽しい會合。（樂城）河北省獻縣。（駕輕就熟）熟練した人。韓愈文『如駕輕車，就熟路。』（試青萍於寸鐵）大才小用の意。（青萍）青きうきぐさ，古の名劍の名。李白與韓荊州書『青萍結絲，長價於薛下之門。』（寸鐵）一寸許の刃物，微物。（伏櫪如故）已を卑下して人に屈し何等向上せぬ意。伏櫪は馬が厩の中に伏す，櫪は厩のねだ板。魏武帝詩『老驥伏櫪，志在千里。』（半簾花雨）窓に降りかかる潤花の雨。（滋切）愈々切なるものがある。

【口譯】長閑なる90日の春景色も一瞬の間に青葉の初夏の候になりました。知己の友は遠く離れ住み、何日になつたら再會出来ることや、あなたは新に樂城に赴いて職に就くのは熟習した仕事をするでもあり、至極結構なことである。但しあなたの如き優れた才能を持ちながら、つまらない仕事に就くことは大才小用の憾あるを免れない。私は依然として何等の進境もなく、さみだれ降りしきる昨今親い友もない孤獨の役所勤めは淋しいものである、殊に庭木にさひづる小鳥の聲を聞く時など友を思ふ心の愈々切なるものがある。

三、復丁玉燾（過訪不遇）（通候類、二十八）

茆店談心之後，忽忽自春而冬。新正過謁尊齋，知爲文讖招留，無緣握手。自看上元燈火，弟即驅車出省門矣。

正以瀛州樓畔，吾與亭邊，時增秋水伊人之想；而手書適至，不啻清風來故人也！

浴蘭節近，作客者非無家室之思；無如籠鳥依人，每多牽縈。三春虛擲，重午空來；艾綠蒲香，惟

有引觴獨醉耳！

【語釋】（茆店）茆は茅に通ず，田舎の小旅舎。（談心）心を傾けて話す，打ち開けて話合。（新正）新年。（尊齋）他人の書齋の敬稱。（文讌）文士連の宴會。（上元）上元の夜，元宵節，舊曆正月15日。（驅車）車に乗つて行くこと。（秋水伊人）親友を思慕すること。詩『所謂伊人，在水一方。』（清風來故人）杜牧詩句。全く君と面接したも同様であるの意。（浴蘭節）端午節。蘭をうかべたる湯に入る。大戴禮『5月5日，蓄蘭爲沐浴。』（籠鳥依人）人にたよつて生活する者は籠の鳥同様自由がきかない。（牽縈）ひきつながる。（三春）春季3ヶ月。陰曆の正月は孟春，2月仲春，3月は季春，

【口譯】田舎の小旅舎に於て心を傾けて話合つてから，早くも春から冬の季節になりました。新年正月にあなたを書齋にお訪ねしましたが，あなたは宴會に出掛けられて，人に引留られて居ることを知て御面晤の機を得ず歸りました。上元の夜の燈火を見物してから私は車に乗つて省城を去り，瀛州樓のほより吾與亭の下で丁度あなたのことを思ひうかべてゐる時に幸にあなたのお手紙を受取り全くあなたと面晤したも同様の思ひを致しました。端午の節句も近づきましたが，他郷に暮すものは留守宅のことが氣にかからないのではないが，如何にせん人に雇われの身は籠の中の鳥も同然で何時も忙しく身をぬくことが出来ません。春の季節も空しく過ぎ去り又5月5日の端午節も間近かになりました。私は淋しく目によもぎの緑をながめ，菖蒲の香氣をかいで獨りで酒杯を舉げて氣晴しするより外はない。

四、答滄洲刺史周（絃契闊）（候絃類、四十九）

以半年之契闊，接兩面之殷勤；甫罄離懷，又增別緒。

回憶依棲連暮，晨夕追陪；覺人生聚散之絲，不殊海萍雲鳥。言之可慨！

頃得沙河驛發寄手書，知台旌取近而回；瞻望後塵，蘊結奚似？

且以不腆將意，猶辱齒芬，則增我顏汗矣！

【語釋】（契闊）久闊，ぶさた。（殷勤）ねんごろ。（離懷）人と別れて後のおもひ。（別緒）別離の情。（連暮）暮府，暮賓。（追陪）つき隨ふ，連れ從ひて行く。韓愈詩『終日相追陪。』（海萍雲鳥）踪跡定らず聚散常なく忽ち散じ、海洋の浮草雲中の飛鳥も同様であるの意。（台旌）貴下。旌は旗類之一。敬稱其隨行之旌旗，不敢直稱其人也。（取近）近路をする。（蘊結）思ひがむすばれて解けない。（奚似）何ぞ似ん，……の至に堪へず。（齒芬）禮をいふ。（不腆）手あつくない，賜物の厚からざるを謙遜して云ふ。

【口譯】半年間に兩度面晤の機を得て御親切に預りまして，やつと久闊を敘すことが出来ました

のに又別離の情を禁じ得ません。回顧すれば以前あなたの役所の幕友として私は朝夕あなたに、つき随ひましたが今は又離ればなれとなり、人間世界は踪跡定らず聚散常なく正に大海の浮草、天かける飛鳥も同然であることを思わせませ、洵に歎かわしいこといわねばなりません。只今あなたの沙河驛から出されたお手紙を受取り近路を辿つて歸郷されることを知りました。遙かにあなたの後ろ姿を拜して何ものにも比し難い悲しみを覺えます。又お粗末なる餞別に對して御鄭重なるお禮の言葉を忝うしまして恐縮に堪へざらしめるのであります。

五、復謝秀三（言八月内反省）（通候類、三十）

上谷斗城耳，衡宇又隔數武，竟未一瞻丰采；春正過訪，彼此復相左，何緣之淺也？

頃惠翰言，如對芝光而聆玉屑；足下移榻蠡州，既聯舊雨之歡，又屬舊遊之地，動定自多融鬯。如弟依人海角，徒以兩地神交，興采葛采蕭之咏。

中秋擬一反省，不審桂香梧影之中，得奉雅人清話否？

【語釋】（上谷）河北省保定府の別稱。（斗城）城は小さく斗の如く，小さな町。（衡宇）衡は門，宇は屋，粗末な家。（數武）數歩，距離の近いこと。（丰采）人の容貌。（相左）行き違い。（玉屑）長生不死の仙薬と稱する玉の粉，言語の優美なることを贊美して玉屑の如しといふ。（移榻）任地を移す，轉居する（蠡州）今の河北蠡縣。（舊雨）古きなじみ。（舊遊）一度行たことのあるところ。（動定）起居。（融鬯）とけやはらぐこと，氣分ののびやかなること。（海角）海邊。（神交）形にかかはらず精神上の交。（采葛采蕭）思慕すること。詩經『彼采葛兮，1日不見，如3月兮；彼采蕭兮，1日不見，如3秋兮。』（桂香梧影）8月の風景。

【口譯】保定は一つの小都市で、あなたの家と私の家とは僅か離れてゐるに過ぎないのに、ついで一度もあなたにお目にかゝる機会がなく、正月にあなたが私を訪ねて下さつたが、お目にかゝれず、どうして斯様に私達はお縁が薄いのでせう。只今あなたのお手紙を受取り、恰もあなたに面會し、あなたのお話を聞いてゐるも同様に思われました。あなたは蠡州に轉任なさるといふことは、既に舊時の朋友も澤山あることでもあるし、又以前に住まれた案内の土地でもあり、お起居も氣樂にいけると思われます。私は主人持ちで遠く離れて海邊に住居する身、空しく獨りぼつちで詩經の『采蕭采葛』の句を吟詠してあなたを思念して暮すのみであります。8月15日の中秋の佳節には省城に一度歸つて來る積りで居りますが、8月の候にあなたとお目にかゝり歡談することが出來ますかしら。

六、復朱鶴汀（通候類、二）

手書遙賁，知足下適患河魚之疾；造化小兒，何不仁乃爾？近日定占勿藥矣。弟貧也非病，客自家鄉來者，道波臣爲虐，年穀不登；旅人無以自存，又重以內顧憂。如何如何！

足下作歸省計否？新涼入序，寄語加餐。

【語釋】（遙賁）遠方から降る，遠地の人から手紙を受取つた。（河魚之疾）腹の病氣，吐き下しの病。（造化小兒）造化は創造化育の意にて天を云ふ，造物主を指す。小兒は戯言。（不仁乃爾）どうしてこの様に無慈悲なのであらう。（占）うらなふ，推量する。（勿藥）醫藥を用ひざること，病癒ゆ。（貧也非病）貧乏になやんでも病氣でわなない。（客）ある人。（波臣爲虐）波臣は魚の異稱，水神を云ふ。虐は災厄，水災に遇ふこと。（年穀不登）この年五穀實らず。（旅人）他郷に寄寓する人の意。（如何）どうしたらよからう。（内顧憂）内は家庭を指す。内部に對する心配。（歸省）故郷に歸り父母を見舞ふこと。（新涼入序）秋になつて氣候が涼しくなる。（寄語）傳言，お勧めする，祈る。（加餐）多く飲食する，身體を大切にする。

【口譯】遠方からあなたのお手紙を受取り、あなたは腹らくだしの病氣を患ふて居らるゝことを知りました。天の神様はどうしてこんなに無慈悲なのでせう。近頃は屹度癒つて居られることでせう。私は貧苦に悩んでは居りますが病氣ではありません。郷里から人が來ての話によれば大水害の爲めに今年の米の收穫はないといふことです。旅に出て暮す人間は自分一人の生活がやつとのことなのに、留守宅のことまで心配せねばならぬとは全くどうすればよいのでせう。あなたは歸郷して父母を見舞われる計畫はありませんか、氣候も段々涼しくなつて來ました。お體を大切になさいますよう祈上ます。

七、與龔甘林（通候類、十）

菊秋天假之緣，會逢其適！

承足下的愛我諄摯，歡若平生。古人傾蓋之交，當不是過。

別後歸來，席尙未暖；以清查事，脂車入省，長至前三日返館。板橋茅店，日僕僕於朔風寒雪中；依人況味，可想而知。

歲杪作旋省計否？如有同心，則握手言歡，近在屠蘇入飲時矣。

【語釋】（菊秋）菊月，陰曆9月の別稱。（天假）天與の。（諄摯）極めてねんごろの義。（歡若平生）歡喜は久交者のかつての有様である。（傾蓋）車を駐めて車のかさを傾け近づきて語る，一見して故舊の如く相親むにいふ。孔子家語『孔子之郟，遇程子於途，傾蓋而語終日，甚相親。』言在途相遇，交蓋駐車，相語終日，喻交誼之親密也。（席尙未暖）坐席未だ暖まらざるにまた他出する，多忙なる義。（脂車）脂は脂膏、脂油で、車輪に油を塗り旋轉をよくする。

(長至)冬至、夏至いづれも長至といふ。この章に於ては冬至を指す。(板橋茅店)旅行の景況をいふ。温至筠詩『鷄聲茅店月、人跡板橋霜。』(僕僕)勞苦の形容、旅行の煩はしきさま。(朔風)北風。(叢杪)年末。(屠蘇入飲時)正月の意、屠蘇を酒に浸して正月元旦に飲用すれば一年中の邪氣を拂ふといふ。

【口譯】去る9月の候には上帝のお恵みによつて私達はお目にかゝる機會を得まして、故舊同然のねんごろなるもてなしを受けました。古人は途上で友人に邂逅すれば車を止めて、終日語あふて親睦をはかつたと申しますが、やはり私達のこの様なことにすぎなかつたのであらうと思ふのです。私はあなたとお別れし役所に戻つて後未だ席も暖まらない中に又調査の用件をおびて省城に出掛け、冬至の日の3日前にやつと役所に戻りました。道中はわびしい田舎旅館に投宿して、毎日寒風吹きしく中を諸方かけまわりました。他人に使われる身のつらさはすぐ想像出来ることです。この年末には省城に出掛る企がありませんか。若し私達兩人がこの様な同じ考だとすれば互に手を取り談笑出来る日は近く新年正月の屠蘇を祝ふ時になりましょう。

八、與鄧馨圃(通候類、三十九)

一車一笠，道左相逢，數語分襟，不勝悵惘！屢荷手書遠及，意緒纏綿；感舊雨之多情，益停雲之在念。祇以公私憧擾，南北迢遙；雙鯉未將，良由於此。

五兄制行立品，寓才華於醇謹之中；譬諸璞玉渾金，含章蘊秀，宜乎先聲所至，契合上游。客歲榮署下沙，調梅小試，已見一斑。而惠政所施，深入民隱，以故攀轅臥轍，父老留連；大僚推重賢能，自必授以繁要之區，俾資展布，行見隆隆直上，造福於吾浙者，正未有艾，當不僅理謏奏最已也。弟承令兄不棄，五載於茲，自愧庸庸，未能稍有匡益；惟實心實力四字，差堪自信。

前歲謬思援例，本非腸肥腦滿之秋，而作赤手空拳之舉，支絀概可想見。

適家兄以弟北居多累，招之使往，因將眷屬往東昌，每念高堂垂暮，捧檄難遲。仍以力有未遑，依然雌伏。始信強弩之末，即魯縞亦莫能穿；以視吾兄快先著鞭，春風得意。相去奚止霄壤耶？

西子湖頭，雲山如畫；公餘覽勝，逸興何如？

【語釋】(一車一笠)朋友の交の親しき貌。越諺『君乘車，我戴笠，他日相逢下車揖。』(道左)道の傍。(悵惘)失望、失意のさま。(纏綿)まづはり離れざるさま。(停雲)親しき友を思ふことにいふ。行く雲をとゞむる義にて歌ふ聲の妙なるにいふ。陶淵明有停雲詩四章，序云『停雲，懷親友也。』(公私憧擾)公私ともに繁忙。(迢遙)長く遠し，はるばる。(雙鯉)雙魚と同義，手紙の意。(將)送る。(才華)はなやかなる才。(蘊秀)すぐれたるをつみかくす，文采をつみたくはへる。(寓才華蘊秀)言其才華内蘊，不浮露於外，其質地之優美，有如未剖之玉，未鍊之金也。(制行)事を程よくする。(立品)品行方正。(醇謹)てあ

つくしてつつしみぶかし。(璞玉渾金) 琢かざる玉とあらがね、人の性の質朴純美なるをいふ。(含章蘊秀) 含章はかざりを内にふくみたくはふ。『包含着文采、隐藏着秀氣。』(先聲) さきぶれ。『人未至而名先至』(契合) 親密。(上游) 高位にある人、上官。(榮署) 代理として榮轉する、本官の官吏が死亡、免官、出差等の事由により其任にあらざるとき他の官吏をして代理せしむるをいふ。(下沙) 南隴縣の下沙鎮。(調梅小試) 大器小用。(民隱) 人民のくるしみ、隱は痛、民瘼と同義。(攀轅臥轍) 人民が、牧民官の留任を希望して車の轅にすがり車のわだちに臥して引留める。人民の引止めることの懇切なること。(父老) 村の重立たるとしよりの人。(留連) 名残惜しくて別れられない。(大僚) 大官。(推重) 推し重んずる、たふとび重んぜられる。(繁要) 繁盛にして樞要なる地域。(展布) 大なる才能をのびず。(隆隆直上) 一步一步昇官する。(艾) 盡る。(理謫奏最) 鹽務行政の面に於て功を奏す。(匡益) たゞして益する、助ける。(實心實力) 本氣になつて實際につとめる。(援例) 前例を引く、捐官の規定によつて政府に金を納めて官職を買ふ。(腸肥腦滿) 經濟の充裕すること。(庸庸) 平凡なること。(赤手空拳) すで、空手。(支絀) 財用不足、金が缺乏する。(東昌) 現在の山東省聊城縣。(高堂) 母親。(捧檄難遲) 任官のお召状をささげもつ、親の爲めに志を屈する、仕官することはこれ以上遅らすことは出来ぬ。(雌伏) 人の下につき従ふ。漢趙溫爲京兆尹、嘆曰『大丈夫會當雄飛、安能雌伏。』(強弩之末) つよき大弓にて發射せし矢も其の力の盡きたる末。(魯縞亦莫能穿) 魯國の薄絹を貫く程の力も無い。英雄も衰へては何事も成し得ざる義。(快先着鞭) 人より先に着手する、早より仕官しての意。(霄壤) 天地といふに同じ、天と地との隔る如く大差あるに喩ふ、雲泥の差。(西子湖) 浙江省杭縣の西湖。(逸興) 世俗を脱してすぐれたる風流のおもむき。

【口譯】君は車に乗り、私は笠をかぶりかちだち、途中で出遇ふて、二こと三こと話をかわして別れ心中すこしくものたらぬ思ひをしました。君より度々遙々御懇篤なるお手紙を頂戴して舊友の何日も變らぬ友情に感激し愈々君を思慕することの切なるものがあります。只だ公私共に非常に多忙を極め、また私達は一人は南に、一人は北にお互に遠く隔離されてゐる、平素御無音に打過してゐるのもその爲めであります。五兄は物事を處理するのに程好く、品行方正でもあり、内にすぐれたる文采をたくはへ、外面は誠にてあつくつつしみぶかく、たとへば石の中の玉、みがかざる黄金の如くで立派な資質がうかがはれるので、自然に名聲が高まり、上役にも親密になるのです。昨年下沙地方に長官代理とし榮轉されたのも君の大なる手腕を試験する爲であつたことがよく分ります。君は施政に當り恩恵を施したことを庶民は深く感激し、君の轉任に際し留任運動が盛んに行われたのであります。殊に父老の人達は名残を惜んだので

す。上司は君の才能を重んじて、繁盛な土地に轉任さすのは當然のことであり、君は又大いに本領を發揮して事に當り漸次昇任して行くのであります、私達の浙江省にもまだ地方を治める大切なことがらがのこされてゐます。只に鹽務行政面の處理に功を奏するのみに止らないのであります。私は君の長兄に推輓されて既に5年にもなりますが、平平凡凡何等貢獻するところなく慚愧の至りですが、只た誠心誠意つとめることがせめてものほこりです。一昨年私はみだりなる考へを起し捐官を致しましたが、元來金を持たずにやつたことで、遣線算段の程は御想像つきましよう。丁度私の兄が、私が北方に居つて苦勞ばかりしてゐるのを知つて私を呼び寄せてくれまして、家族を聊城縣に轉居させました、常々年老いたる母親のことを考へますと、この上仕官のことを遅らすことも出来ません。但し力量がない爲めに依然として仕官することが出来ません、そこで力の盡きはたものは、ほんの一寸とした事を成すにも十分やれないといふことが分りました。それに比べて君は早くから仕官されて非常に得意で居られます。全く雲泥の差があります。西湖の雲山の風景はまさに一幅の畫です。役所がひけてから後散策するのは全く世俗を脱した風流のおもむきがあります。

九、賀梅嶺傭（生辰）（慶弔類、一）

小春十日、爲足下懸弧令旦；回憶去年，歌徵金縷，酒泛紅螺；諸同人濟濟盈盈，如集蓬壺仙侶。今以關山遠隔，未克趨陪；惟有遙頌九如，臨風拜手耳。

【語釋】（小春十日）こはる、陰曆十月の異稱。陰曆十月は天氣暖和中春の様であるから小春といふ。（懸弧）古は男子が生れたときは弧を門に懸げる故に男子出産を懸弧といふ。（令旦）吉日。（懸弧令旦）は男子の誕生日。（金縷）歌曲の名。（紅螺）酒杯。紅螺似鸚鵡螺而殼薄，外暗褐，內鮮紅，可作酒器。（濟濟）衆多。（盈盈）充滿する。（蓬壺）仙山の名。（九如）人の誕生を賀す祝詞。詩經にある九つの如字がある詩句・詩經曰『如山如阜，如岡如陵，如川之方至，如月之恆，如日之升，如南山之壽，如松柏之茂。』（臨風拜手）風につれて祝意を表す。拜手は頭を手の邊まで下げる。『拜手，先以兩手拱至地，乃以頭頓至手。頭至手而不至地，故曰拜手。』

【口譯】十月十日、この日はあなたの誕生日です、思ひかへせば去年の今日は、多くの同僚の友が、一堂に會して、歌舞の中に祝杯を舉げた、丁度蓬壺山の仙人が一個所に集會した様な有様であつた。今は山河遠く隔てられ拜趨の上親しく祝詞をのべ盛宴に陪ることが出来ません。只だ遙かに風につれて祝意を表すのみです。

十、賀陳筠青（生女）（第二卷、慶弔類、二）

昨得手書，以弟夫人弄瓦而不弄璋，其辭若有憾焉。不知二五構精，伉儷同功，是誰之過，而爲是怏怏耶？

況雛鳳之降，即以開么鳳之先；謝氏烏衣，不可無林下風以濟其美，正不必謂夢月之不如夢日也。

【語釋】（弄瓦弄璋）女子を生むことを弄瓦といふ。瓦は紡^{イトコマ}埴，男子を生むことを弄璋といふ。璋は玉、徳を玉に比せんと欲する意。詩經小雅『乃生男子，載寢之牀，載衣之裳，載弄之璋。乃生女子，載寢之地，載衣之裼，載弄之瓦。』（憾）必中の不満。（二五構精）男女精をあはす。男女の交接。（伉儷同功）伉儷は夫婦，同功は一人の功でない，夫婦二人同じくこれをしたるものである。（怏怏）心平かならず，不愉快，うらむ。（雛鳳么鳳）鳳凰は瑞鳥名，雄を鳳，雌を鳳といふ。雛鳳は女子を生むに喩へ，么鳳は男子を生むに喩ふ。（林下風）山林に幽居せる隱士のさま。女兒に喩ふ。（謝氏烏衣）晋の時謝安は烏衣巷に居住し，その子弟は大いに賢者であつた。『林下風致』婦人にして風雅の趣味を有するをいふ。『謝安姪女謝道韞，神情散朗，有林下風。』（夢月）女子を生むこと。（夢日）男子を生むこと。

【口譯】昨日御手紙に接しまして拜讀致しましたが、君は奥様が女のお子さんをお生みになつたので御不満の様に云われておりますが、君は男女交接して子供を作るとは、夫婦二人の合作であつて、一人の責任ではないといふことを御存知ないのですか。誰の罪だといふて、その様に不平を云ふのでしょう。女子を生むことは即ち將來男子を産む前兆ともいふべきでしょう。男子を産んだらそのわざへとして女子がなくてはいけません。實際女子を産むは男子を産むにしかずといふには及びません。

十一、唁陳名山（喪母）（慶弔類、十三）

西風落葉，正念故人；忽素簡遠來，驚知伯母大人仙逝，殊深感悼！吾兄孝思純篤，必以乍違色養，爲百身莫贖之愆；然伯母音容雖邈，懿範猶存。況乎生盡其歎，沒盡其禮，於子職無少缺憾，亦可稍釋泉魚之痛矣。

弟以關河修阻，未獲親奉芻香；薄具楮儀，聊申奠醊，不足當徐生一束也。

九峯綜理元城幕務，十年淬礪，穎脫一朝；以兄至戚投之，諒無不允。如弟碌碌，恐難恃爲聲援耳。

【語釋】（唁）とむらふ。（西風落葉）西風は秋風の意，五行説にて秋を西に配するが故。秋深まり草木枯衰ふること。（素簡）喪を報ずる書信。白紙を使用するが故に素簡といふ。（仙逝）死去すること。（感悼）深くかんじなげきいたむ。（純篤）大いに篤し。（乍違）突然背く。（色養）常にこれにして親に孝養すること。（百身莫贖）あがなふことの出来ぬ大なる罪。（音容雖邈）音聲容貌すではるけく遠いとは雖ども。（懿範）美しき手本。（子職）子

たるものゝ道。(皋魚)周時孝子、親亡、嘗曰『樹欲靜而風不止、子欲養而親不在。』輒流涕沾襟。(修阻)隔絶する、山河懸絶といふが如き。(親奉芻香)親しく弔ひ祭る。(楮儀)喪に對する贈物。餽贈喪禮之物、如香紙等。(奠醑)弔ひ祭る。(徐生一束)徐生即徐孺子。後漢書『郭林宗有母憂、徐孺子來弔、置生芻一束於廬前而去。衆怪不知其故。』林宗曰此必南州高士徐孺子也。詩不云乎『生芻一束、其人如玉。』「生芻」は刈りて未だ枯れざるまこも。「其人如玉」は其徳玉の如き賢人が世に用ひられず、白駒に乗りて遠く去らんとするを惜みて、せめて一束の生芻を秣(マグサ)として贈りたしとの意。(元城)今の河北省大名縣。(幕務)幕府の仕事をする、幕府にありて文筆に従事する。(淬礪)錬磨する。(碌碌)凡庸。(聲援)言葉をそへて助勢すること。

【口譯】世は既に秋に入りました、丁度あなた様を思慕申上げて居りましたところ、突然遠方よりあなたのお手紙を頂戴し伯母様の御逝去遊ばされたことを知りまして非常に驚入りました。痛ましいとも恨めしいとも申し様もありません。あなたは平素大變親孝行の人ですから、突然母上の死去に相遇して恰も自身あがなふことの出来ぬ様な大な罪を犯した様に思われることでしょう。然しお母様の晉聲容貌は永久に隔絶されたとはいふものゝお母様の残された立派なお手本とすべきことはなをこの世に存在します。尙お母様在世中あなたは十分孝養をつくされ、お母様の歡心を得て居られたし又死後は葬儀に十分禮をつくされて人の子たるものゝ道を缺くことなく十分果されましたことなれば、此上は最早何事も定まりたる事と御あきらめらるゝ外無之かと存じます、實は早速參上仕り親しく弔問申上べき筈であります、何分遠隔の地のことなれば意にまかせず、ここに心ばかりの御香料をお送り致し、哀悼の意を表します。九峯は大名縣の幕府の仕事に従事し十年間精勵して、群を抜くことを得ました。あなたは親しい間柄であるから彼のもとにたよつて行けば屹度世話をしてくれましょう。私は凡庸で恐らく何んの助勢も出来かねます。

十二、慰良郷邱友(被水)(慰勸類、五)

猝聞中都水溢、深以爲念；得手書、知足下履險如夷、始信河伯有靈、自爲吉人默相也。他日之載膺多福、正未可量；少有耗折、不足介懷。

【語釋】(良郷)河北省の縣名。(邱)丘に通じ、丘は大、邱友は第一の友の意。(猝)忽然。(中都)北京附近の地。(溢)滿る。(履險如夷)危險にさらされてしかも安隱なること。(河伯)河宗と同義。水の神。河伯是華陰人、以八月上庚日渡河溺死、天帝補署爲河伯。(吉人默相)善人は天の助がある。(載膺)載福と同義。さいはひを受ける、膺受。(耗折)損失。

【口譯】突然北京地方に水災があつたことを聞いて、あなたの安否を心配してゐました。お手紙を頂いて危険にさらされてしかも安隱であつたことを知りまして安心しました。そこで始めて水神様の靈驗あらたかで暗黙の中に善人を助けてくださることを信じました。あなたは將來澤山の幸福を享受されることはいふまでもないことです。多少の損害を蒙られたとてお心を痛められるには及びますまい。

十三、勸陳箕亭（勿出門）（慰勸類、五）

以局外而參局中之事，自知不中肯綮；足下俯納芻蕘，竟止西行，或亦愚人一得也。緩急時有耳，所須又無多金，返館後措應，勿念！

【語釋】（局外）無關係の人。（局内）當局者。（參）參與する。（肯綮）肯は骨につく肉，綮は筋骨の結合せる所，轉じて事の急所又は要所に喩ふ。綮音馨，不讀啓，要害地方曰「肯綮」。（芻蕘）くさかりときこり，微賤の者の義。（俯納）申請を採用する，貴い者が卑い者の希望に従ふこと。（愚人一得）愚人も一つ得たる事ありて，時としてよき分別を出すことあり。古諺『智者千慮，必有一失，愚者千慮，必有一得。』（緩急）ゆるやかなると急なると，急の事變のさしせまること。かねがいること。（措應）工面して集める。

【口譯】關係のない立場にあるものが、當局者の事に容喙するのは、自分でも妥當でないことは承知してゐますが、あなたはひたすら私の勧めを聞き届けて、つひに西方行を中止されました。或は愚人の一得といふことになるかも知れません。金が無いといふことは人間には常にあります、あなたの入用な金は多いことでもありません、館に戻つてから工面してあげましよう。御心配下さるな。

十四、謝滄州諸友（送蟹）（辭謝類、十三）

重陽佳序，正以有酒無蟹，空結臨淵之美；何意楮生下賁，竟偕公子同來。即命庖人，立烹介士；樽前風味，迥異尋常。

昔王宏白衣送酒，千古傳爲美談；今諸君青衣送蟹，未始非後先佳話也。屬饜之餘，曷勝銘謝？

【語釋】（佳序）佳節。（臨淵之美）徒に幸福を望まんとするよりは退きて幸福を得る素地を作るに若かずとの意。漢書董仲舒傳『古人有言，臨淵羨魚，不如退而結網。』（楮生）紙。書信に喩ふ。（下賁）上より賜わる。（偕）ともなふ。（公子）蟹。抱朴子『山中辰日，稱無腸公子者，蟹也。』（庖人）くりや人，料理人。（介士）甲冑をつけたる士。蟹。因蟹係甲類，故又稱介士。抱朴子『蟹呼爲橫行甲士。』（樽前風味）酒を飲む時のうまき味。（迥）遠く，はるかに，大いに。（白衣送酒）白衣は無位無官の人，未だ仕官せざる人は白衣を著るが故なり。陶淵明九月九日に酒なかりし時、江州の刺史王宏の使者が白衣を著て酒を送り來たりし故

事。續晉陽秋『陶潛嘗九月九日無酒，出籬邊悵望，未幾白衣人至，乃王宏送酒使也。』（青衣）賤業をなす者，僕婢の意。（後先）あととさきと。おくれさきだつ。前後。（佳話）美談。（鑿）たべ飽く。

【口譯】九月九日重陽節の日に丁度酒あれども肴なく、只だ水面に向つてぼんやり目をやつてゐた。思ひがけなくもあなたから一通の手紙と蟹とを同時に送つて來た。そこで料理人に命じて直く蟹を料理させ、酒の肴として飲んだ、その時の酒の味は本當に平常の時とは大いに異なるものであつた。昔王宏が使ひに酒をもたして陶淵明に贈つたことは千古の美談として人々の間に傳えられてゐるが、現在あなた達が使ひの人に蟹をもたしてくれたことを古のことゝあとさきの美談として世に傳えることが決していけないことはない。

十五、還玉田縣李（送程儀）

秋間猝有南旋之舉，閣下錫之兼金，壯其行色；以弟庸陋，猥荷摯懷，屢分鶴俸之餘，益切蛇珠之感。

比得家報，欣知老母康健；是以半桌孤篷，欲行又止。餽贐之雅，不敢拜登。謹俟便羽東來，奉以歸趙；而閣下之稠情古誼，已與潭水俱深矣！

【語釋】（玉田縣）河北省縣名。（程儀）餞別に贈る品物。（猝）にはか、だしぬけ、急遽。（南旋）南方に歸る、こゝでは歸郷する。（錫）賜。（兼金）よい黄金。「賜以好金」。（壯其行色）旅支度を充實させる。（庸陋）おろかでいやしい。（荷摯懷）懇切に心遣ひする。（鶴俸）官俸。（蛇珠）へびの口より吐きたるたま。隋侯珠ともいふ。搜神記『隋侯行見大蛇傷，以藥敷而塗之。其後蛇於江中銜珠以報隋侯，經寸純白，而夜光可燭室，故歷稱「隋珠」。』報恩することに喩ふ。（篷）舟。とまにて織りたるものにて舟を覆ふが故にいふ。（餽贐）贈物。（拜登）恭しく受けとる。拜受而登之於簿籍也。（俟便羽來）用事の次手ある人のあるのを待つ。（歸趙）返却する。（稠情古誼）御厚情御交誼。古誼は交誼の故舊に對する如く密なる意。古の正しき義理。（潭水俱深）ふちの水の如く深い、情の深いこと。李白詩『桃花潭水深千尺不及汪倫送我情。』

【口譯】秋に急遽南方（郷里）に歸らうとして、貴兄から私に立派なおかねを贈られ、私に立派に旅支度を整ひさせました。私の様な平凡なつまらない人間に、なみなみならぬ心遣ひを忝ふ致しました、又たいつも貴兄の俸給をさき與へ下さいまして愈々私をして報恩の心をかためさせました。近頃家信を受取りましたが、最も喜ばしいことは老母の健康が頗るよいことでありまして、それで船に乗り歸郷することを中止することに致しました。貴兄より賜りました澤山の贈物は頂戴することが出来ません。山東に向けて次手の人のあるのを待つて、お返し致します。但し貴兄の私によせられたる御厚情に對しましては深く心に記して忘れません。（完）